

佳作

「沖縄戦を語り継ぐのは悪いことか？」にまつわる

女性三世代各々の暮らし

ぶひ子

あらすじ

孫の照屋ハナコは、祖母と二人暮らし。

ハナコは、祖母との何気ない会話を携帯で撮影し、SNSに載せている。

その投稿の中に、祖母の故郷・渡嘉敷島の集団自決の話があったことから物語は始まる

ハナコは今年で三十路。精神的なストレスから一時的に声が出なくなり、やむなくコールセンターのバイトを辞めて、実家へ住むようになった。

現在は、祖母の面倒を見ながらイラストを描き続け、自宅にて仕事ができないか模索中。

祖母のヨシは87歳、集団自決の生き残り。足が悪く、歩くのもやっと。自分のせいで娘と孫のハナコに迷惑をかけてしまっているとウチアタイする日々をすごす。

ハナコの母・ルリは50歳、ラジオ局に勤務しながらバリバリと仕事を

こなす。

夫は病気により死別。現在は一人暮らし。

母が、ハナコの投稿をみつけ、沖縄戦の取材を依頼するところから、女性3世代各々の暮らしにたいする思いが絡み合ってゆく。

物語中盤となる収録当日、

祖母の実家に住む『謎の黒い人』の存在も交差しながら

「沖縄戦を語り継ぐことは良いことなのか？」という祖母の訴えを解釈しながら話は進む。

無事に収録を終えたあと、母の同僚が祖母と同じ渡嘉敷島出身ということもあり、祖母の生活に光がさしはじめる。

そして、黒い人の存在もあきらかになり、ハナコ的心情が浮き彫りになつてゆく。

登場人物・・・「」は一人称での呼び名

婆ちゃん (87) 照屋ヨシ、「わん」

ハナコ (27) 照屋ハナコ、「ウチ」

お母さん (49) 照屋ルリ、「私」

国吉 (50) 国吉倫太郎、「僕」

ミーカー (23) とくになし、「アタシ」

めぐみ (23) とくになし、「アタシ」

せつこ (90) せつちゃん、「わん」

★プロローグ★

○実家・キッチン（早朝）

ハナコN

「ウチの名前はハナコ、30歳。

ひきこもりです。コールセンターのアルバイトを半年前に辞めました。

いじめられていたわけでも、無視されていたわけでも、仕事がつらかったわけでもないけれど……

まわりの全てが気になっちゃって、自意識過剰なんだはずね、もう疲れてしまつて。数年前に爺ちゃんが亡くなり、以来ひとりぼっちで暮らしている婆ちゃんの面倒を見るというかたちで、実家に転がり込んだのが半年前。」

ハナコ、徹夜明けでパソコン作業

ハナコ 「よしつ、できたぶんを保存して。

と……朝までかかっちゃったなー」

婆ちゃん、起床。手押し車で床を引きずりながらヨタヨタと寝室から出てくる

ハナコ 「ちよ、ちよつと！ 何してるの！」

婆ちゃん 「……足から腰から痛くてよ」

ハナコ 「ウチャトーね？ ウチがするから

婆ちゃんは座ってて」

婆ちゃん、ヨタヨタとキッチンに座る

ハナコ、転ばないように支えながら

婆ちゃん 「よっこいせつと」

ハナコ 「婆ちゃん、起きてすぐナンギしよ

うしたら、転んで大変するよー」

ハナコ、ケトルのスイッチを入れ、仏壇

の湯飲みを洗い流す。冷蔵庫からミキを

取りだし、婆ちゃんへ渡す

※ ミキはお米を原料にした飲み物で、

沖縄の高齢者に広く親しまれています

ハナコ 「婆ちゃん、朝はミキでいいの?」

婆ちゃん 「プハー、生ちげーたん。朝はこれ

だけで充分やる」

ハナコ 「昔からミキじょーぐーだからねー」

婆ちゃん、ゴクゴク飲む

ハナコ 「寝ているときにベッドから落ちそうだったよ。もつと真ん

中に寝ないと」

婆ちゃん 「して、ベッドの真ん中に黒い人が寝ているのに。潰したら

可哀想さ」

ハナコ 「前から思うんだけどさ、その黒い人って何じゃらほい?」

婆ちゃん 「わっからん」

ハナコ 「最近の話ね?」

婆ちゃん 「いるのは、今年からだはずよ。

ぐまーぐわーやる、子供あらんがや」

ハナコ 「もしかしてキジムナーかな」

婆ちゃん 「キジムナーや、うぐとうーあらん」

ハナコ 「そっか、婆ちゃんはキジムナー見たことあるんだよね？」

婆ちゃん 「渡嘉敷島だよ」

ハナコ、沸騰したケトルからお湯を注ぎ、

新しいお茶の入った湯のみを仏壇へ、

線香もあげる

ハナコ 「先週さ、いきなし新聞社の人から連絡があつてね。マジム

ンの絵を描いて欲しいっていう仕事の依頼」

婆ちゃん 「ぬーんでいー?」

ハナコ 「キジムナーのことが知りたくてさ。やっぱり、ガジユマルの下にいるの?」

婆ちゃん 「あらん、田んぼに川が流れているさーや、そこがあぜ道に

なっているわけよ。10匹びけーうたんど」

ハナコ 「あれま? そんなに?」

婆ちゃん 「夜、出てきよった」

ハナコ 「キジムナーって何でわかるの?」

婆ちゃん 「せつちゃんがよ、川のそばに住んでいたから『キジムナー、出じとーんどー』んで見えるわけよ。わったー家まで呼びに来よった」

ハナコ 「して、怖くなかった?」

婆ちゃん 「まだ小さい頃だのに怖かったよー。袖で、顔を隠しながら

見ていたさ」

ハナコ 「色はまっかーらー?」

婆ちゃん 「まっくるーよ。昔の渡嘉敷島は街頭も何もないから、夜はまっくらしんだわけさ。キジムナーはロウソク持って歩きよったからよ、火いの灯りでわかりよった」

ハナコ 「それ、隣村の子供じゃないの?」

婆ちゃん 「夜中に人が歩くかよ」

ハナコ、おもむろに携帯電話で婆ちゃん

を撮り始める

婆ちゃん 「コレ達が歩いたあとはタニシの殻がいっぱい落ちているわけさ。さわったらでーじど。キジムナーヤーチューンでいよ、

アチコチかぶれよったさ」

ハナコ 「へー、ふしぎー」

婆ちゃん 「やーや、さつきからぬーそーが？」

ハナコ 「携帯で、婆ちゃん撮ってる」

婆ちゃん 「ぬーんち？」

ハナコ 「パソコンで日記をつけているの。友達同士で『今日はこんなことがありましたー』って報告しあう感じ」

婆ちゃん 「いちゆなさんやー。こんなして家でパソコンばちやばちやーさーに儲け塾できたら上等やしがて」

ハナコ 「そうなの、面白い日記ならみんなが見てくれるから、そこに作品も載せれば仕事の依頼が来たりするんだよ」

婆ちゃん 「して、ハナコの日記に婆ちゃんのこと書いても大丈夫だわけ？」

ハナコ 「ウチの絵よりも、婆ちゃんのこと載せたほうが人気あるっ

てば（笑）」

婆ちゃん 「わったーがはわからんさ」

ハナコ 「今の話も日記に載せてみよーね。みんなが『イイネ』するはずよ」

婆ちゃん 「ハナコの日記は誰がも見れる？」

ハナコ 「パソコンか携帯電話があれば」

婆ちゃん 「せつちゃんも探せるかね」

ハナコ 「せつちゃん姉さんはパソコンさわりれきれんでしょ（笑）。孫なら探せるはずよ。名前とかわかる？」

婆ちゃん 「長いこと会っていないのに、孫の名前までわかいみひゃ

ハナコ 「ほへー」

ハナコ、携帯から日記を投稿

婆ちゃん、ミキを飲み干し、しばし沈黙

ハナコ 「よしっ、でわまたイラストでも描いてこよっかな。部屋で

作業しとくからさ、お腹すいたり、テレビが観たいとか、何かあつたらすぐ呼んでね」

婆ちゃん 「わんぬ心配さんけ、大丈夫よ」

ハナコ 「遠慮しちゃダメダメ、ウチはそのために家にいるんだのに」

ハナコ、部屋へ戻り、作業再開

婆ちゃん、ボーっとしている

ハナコN 「ウチが何気なく投稿していた

この日記から物語は動き始めます
さて……その日のお昼すぎのこと」

★起承転結の起★

○実家・ハナコの部屋（午後）

ハナコ、作業に疲れ、ベッドで仮眠中
お母さん（照屋ルリ）から電話がくる

ハナコ 「ほーい」

お母さん 「ハナコ？ 今、寝てたでしょ？」

ハナコ 「お母さん？（寝ぼけまなこで）」

お母さん 「私は朝から忙しいのに、アンタは昼間からゴロゴロしてな？」

ハナコ 「徹夜作業だったんですけど……」

お母さん 「そんなことよりも、アンタの日記面白いさ。沖縄戦の話とかよ」

ハナコ 「婆ちゃんがたまに集団自決のこと喋りだすから、それ動画に撮って載せているだけだよ」

お母さん 「お母さんが働いているラジオ局で沖縄戦を語り継ぐ企画があるんだけど、アンタ達、出てみない？」

ハナコ 「どーゆーこと？」

お母さん 「アンタの日記の動画そのまま。沖縄戦をテーマに、婆ちゃん

んとアンタが何気ない会話をするの」

ハナコ 「ほへー」

お母さん 「これがキツカケで、ハナコの絵に注目が集まるかも知れないよ」

ハナコ 「婆ちゃん、こんな嫌がるはずよ」

お母さん 「だから、アンタにお願いしているわけさ。婆ちゃん、しかしてくれん?」

ハナコ 「取材って、たくさん来るの?」

お母さん 「お母さんと、録音する人の2人くらいかな。来週行くからさ、お願い」

ハナコ 「来週? 何曜日の何時からよ?」

お母さん 「それは後から。まずは婆ちゃんのOKもらって、電話ちよ

うだい」

ハナコ 「まさかこんな展開になるとは夢にも思わなんだ」

お母さん 「ハナコの絵が人気出るように、お母さんも協力するからさ。

ハナコも、お母さんを助けると思って、婆ちゃんに頼んでみてよ。お願いね」

電話、切れる

ハナコ 「自分の話だけしてすぐ切るのかよ、じゅんにB型」

○ラジオ局（続き）

お母さん、ハナコと電話を終えた直後

国吉（国吉倫太郎）、近づいてくる

お母さん 「国吉さん、来月の沖縄戦の企画さ、初回は渡嘉敷島の集団

自決にしよう」

国吉 「テーマ、何か見つけたのか？」

お母さん 「私の娘が実家で暮らしているんだけど、婆ちゃんから聞いた話ってから日記にいろいろと載せているわけよ」

国吉 「フェイスブックとかブログな？」

お母さん 「婆ちゃんと孫が語る『渡嘉敷島の集団自決』、面白そうでしょう？」

国吉 「お前さ、犠牲者が出ているのに『面白そう』って」

お母さん 「『聴き応えがありそう』でしょ？ 来週さっそく取材した

いんだけど」

国吉 「来週はダメだろ、取材あるのに。お前だって、南国新聞に連載しているコラム、来週がメ切じゃなかったか？」

お母さん 「ああ、そっか……明日は？」

国吉 「あちゃーな？」

お母さん 「私は午後から予定あけるけど」

国吉 「暇なわけないさー……でもまあ」

お母さん 「お願い、お願い！」

国吉 「無理って言ったら、お前怒るだろ」

お母さん 「よーし、決まりね！」

お母さん、予定表を確認しながら

お母さん 「じゃあさー、お昼の2時ね」

国吉 「たしかに、渡嘉敷島の集団自決は特集されることも少ないしな」

お母さん 「へー、そうなの？」

国吉 「米軍が最初に上陸したのが座間味島だから、そっちの集団自決の特集が多いではある」

お母さん 「へー、詳しいね」

国吉 「して、渡嘉敷島の生まれなのに」

お母さん 「そうなの？ 何で言わん？」

国吉 「何で言わんって何で聴かん？」

お母さん 「したら国吉さん。東京からの帰国子女って、アレゆくしな？」

国吉 「渡嘉敷生まれの東京育ち、数年前に那覇に来た。って前に

も言ったぞ」

お母さん 「なら、これも何かの縁じゃない？」

スタッフ 「おーい、国吉！ ルーリー！手伝ってくれんかー？」

国吉 「はーい。今、行きまーす」

お母さん 「でさ、国吉さん、企画書作らん？」

国吉 「しちやー激しいな。ミーカーに頼めばいいだろ」

お母さん・国吉、フェードアウト

★起承転結の承★

○実家・キッチン（続き）

ハナコ 「婆ちゃーん！」

婆ちゃん 「ぬーが？」

ハナコ 「あのさ……大変なことになった。来週さ、お母さんが来るってよ」

婆ちゃん 「ルリはわんの娘なのに、実家に顔出すのは当たり前さ」

ハナコ 「沖縄戦の話が聴きたいみたい」

婆ちゃん 「なんでアレが、わんとハナコの会話までわかる？」

ハナコ 「ウチの日記を見たってさ」

婆ちゃん 「なまぬ時代、ぬーくい便利やー。家のことがたちまち広ま

やーに」

ハナコ 「沖縄戦の企画があつて、婆ちゃんの体験談を取材したいんだつて」

婆ちゃん 「取材？ テレビが来るわけ？」

ハナコ 「ラジオだよ、声だけ録音しに」

婆ちゃん 「うぐとうー好かんしがやー」

ハナコ 「断ろつか？」

婆ちゃん 「ハナコはどう思うか？」

ハナコ 「うーん……別にいいけどさ」

婆ちゃん 「やったほうがいいって意味な？」

ハナコ 「沖縄戦を語り継ぐのは良いことだと思ふけどさ、まずは婆ちゃんの気持ちのほうが大事さーね」

婆ちゃん 「沖縄戦を語り継ぐのは良いこと？」

ハナコ 「何だよ、悪いことだわけ？」

婆ちゃん 「沖繩戦を語り継ぐのは良いことで、婆ちゃんの気持ちも大

事？ 矛盾していないか？」

ハナコ 「そっか、乗り気ではない婆ちゃんに無理やりお願いするの

はあんまし良いことではないか」

婆ちゃん 「そーゆー問題ではないさ」

ハナコ 「どーゆー問題だからよ」

婆ちゃん 「ハナコ、お前が昔から学校行かんぬーだったり、仕事辞め

たりしても、婆ちゃん何も言わなかったのは、お前がこん

なのー、ゆーわかやーだと思っていたからだよ？」

ハナコ 「こんなのーってどんななのーよ？」

婆ちゃん 「お前、声が出なくなったとかで、仕事辞めたんだよな？」

ハナコ 「だからそれ前にも話したさ」

婆ちゃん 「もう1回、まず」

ハナコ 「コールセンターのバイトなのに、急に声が出なくなってきた。電話の前に座って、仕事しようと受話器を取った途端に声が出なくなるわけよ」

婆ちゃん 「何でかね？」

ハナコ 「わかんない、自分でも驚いたし」

婆ちゃん 「それで仕事も辞めて、1人暮らしも辞めて、学校辞めたときは何でか？」

ハナコ 「学校は辞めてない、2週間の休学」

婆ちゃん 「だから何でか？」

ハナコ 「だからさ、ウチはあんまし目立つタイプではなかったから、先生達からは『積極性に欠ける』とか『おとなしすぎる』とか言われていたわけよ」

婆ちゃん 「うん」

ハナコ 「ある日。モノレールに乗ってたら、部活帰りの子達も乗って来て、これがまたギャーギャーうるさいの」

婆ちゃん 「うん」

ハナコ 「そのときフと思った。この子達の騒がしさは学校だと『明朗活発』って評価される。ウチの落ち着いた性格は、モノレールでは一般的でも、学校では『元気がない』とレッテルを貼られる。そこに気づかない大勢との生活が、自意識過剰なウチには、息苦しかった」

婆ちゃん 「あんし、むちかさる（笑）」

ハナコ 「学校が苦手だったってこと（笑）」

婆ちゃん 「やしが、そこまで気づいているのに、なんで沖縄戦のことはわからんのか不思議でたまらんさ」

ハナコ 「へー？　ウチの話と、沖縄戦を語り継ぐ話と関係あるの？」

婆ちゃん 「あるから話させているんであつて」

ハナコ 「もう意味くじピーマンです」

プルルル、ハナコの携帯電話が鳴る

ハナコ 「もしもし、お母さん？」

お母さん 「ハナコ？　取材の件、どうかな？」

婆ちゃん 「えー、ルーリーねー？」

ハナコ 「もー、婆ちゃん、うるさい」

ハナコ、婆ちゃんから離れて自室へ

お母さん 「騒がしいけど、大丈夫ね？」

ハナコ 「そばで婆ちゃんがグチグチしたので（笑）今、自分の部屋に来た」

お母さん 「またな」

ハナコ 「でね、来週の何曜日の話だろ？」

お母さん 「ゴメン。来週じゃなくてさ、明日のお昼2時とかどんなー？」

ハナコ 「えー？ 何でまた急に？」

お母さん 「来週でも明日でもアンタ達ずっと家にいるんだし、お願いできる？」

ハナコ 「それって、ウチが家でゴロゴロしながら遊んでいると思ってる？」

お母さん 「ゴメン。ハナコが悪いんじゃないかって、お母さんが予定を勘

「違いしてたの」

ハナコ 「こなして明日のこと間違えるんじゃない?」

お母さん 「すでに予定組んであるし、大丈夫」

ハナコ 「すでに予定を組んである?まだ返事もしてないのに?」

お母さん 「アンタが婆ちゃん説得してくれると信じていたからだよ。

てか、さつきから突っかかってくるけど何なの?」

ハナコ、婆ちゃんに聴こえていないこと

を確認して

ハナコ 「(小声で)今、そばに婆ちゃんいないから言うけどさ。婆ちゃん
んは足腰が痛くても迷惑かけまいこうと遠慮して何でもか
んでも『どーくいないる』するから、よけい目が離せな

くて大変なんだよ?。」

お母さん 「それはわかっているけどさ」

ハナコ 「ううん、わかっていない。ずっとそばにいるウチと、たまにしか来ないお母さんとは、その『わかつている』に温度差がある」

お母さん 「先月も婆ちゃん元気だったさー」

ハナコ 「そこだよ、わかっていないのは。たまにしか来ないお母さんが来たら、婆ちゃんが喜ぶのは当たり前でしょ。」

お母さんが見ている 『元気いっぱい』の婆ちゃん』は普段の5割増しなの。

仏壇に向かって 『死にたいよー』 ってボヤいてるときもあるし、ウチ、いたたまれなくてさ、絵の作業やめてまた婆ちゃんの相手をするから、自由時間なんてほとんどないん

だよ?」

国吉、会話に見かねて、電話を替わる

国吉 「あの……」

ハナコ 「お母さんに八つ当たりしちゃいけないのはわかっているんだけどさ」

国吉 「もしもし? ハナコちゃん?」

お母さんの同僚の国吉といいます」

ハナコ 「あれ? へ? (アタフタ)」

国吉 「いきなり替わって申し訳ない。ハナコちゃんのお母さんは仕事がうんとできるので、僕らも甘えてしまって、ハナコちゃんに負担をかけていることに気づいてなかった。本当

にゴメンね」

ハナコ 「あの、えーっと……はい（笑）」

国吉 「でね、その、いちおう取材はOKということ……いいのかな？」

ハナコ 「あの、はい、気にしないでどうぞ」

国吉 「それと、僕ら以外に若手スタッフも来ると思うんだ。お婆ちゃんが語る沖縄戦のことを勉強させたくてね」

ハナコ 「わかりました（気をとり直して）」

国吉 「でわ、よろしくね」

お母さん 「もしもし、ハナコ？ ゴメンね。アンタに婆ちゃんのこと任せつきりで悪いと思ってる。ありがとね。」

ハナコ 「そーゆーことじゃあな……」

お母さん 「じゃあ、明日お願いね。ゴメンね」

電話、切れる

婆ちゃん 「ぬーんでい？ 来年ってか？」

ハナコ 「明日のお昼2時って。お母さんの同僚も来るみたいよ。

いきなし電話の相手が替わるからビックリしたけど、国吉さんっていう優しそうなオジサンだったよ」

婆ちゃん 「ふーん」

ハナコ 「婆ちゃんにもよろしくねーって」

婆ちゃん 「ふーん」

○実家・キッチン（翌日の午後）

N 「一夜明け、取材当日となりました」

プルルル、ハナコの携帯電話が鳴る

ハナコ 「お母さんからだ、もしもしー?」

お母さん 「ハナコー? 昨日はゴメンねー、今から歩いて行くけど、何だかんだしても15分では着くはず」

ハナコ 「オツケーです」

お母さん 「家のこととか、いろいろさ、その話もまた後からしようね」

ハナコ 「気にしなくてもいいのによ（笑）」

お母さん 「じゃあ、後でね」

○ラジオ局（続き）

国吉 「大丈夫ってか？」

お母さん 「今日は機嫌よさそうみたい」

国吉 「何かそれ？ 娘とまた喧嘩した？」

お母さん 「私は仕事、娘は家のこと、うまいこと信頼関係築けている
と、思ってたんだけどなー。私の頑張りが娘には届いてなく
て、娘の気持ちを私は全然知ろうとしていなかったな、って」

国吉 「打ちのめされているわけか」

お母さん 「ちよびつとね」

国吉 「娘のせいにしてもダメだし、お前もあんまり背負い込むな。
過去は忘れずこだわらずだ。それに分業って、声かけあ

わないと、放つたらかしではそれは他人だよ。分業あらんど」

お母さん 「実家に住んでも居場所あるかなー」

国吉 「お前の実家は職場かもな（笑）」

お母さん 「だあはい、そろそろ行こう」

国吉 「ミーカー」

ミーカー 「はい」

国吉 「僕らは機材がついで先に行つとくからさ、ミーカーはコン
ビニ寄つてお菓子買ってから来てちょうだい」

ミーカー 「えー？」

国吉 「2千円渡しとくからよ。お釣りはもらったらいさ」

ミーカー 「やったー」

国吉 「ただ、ていーちなーあらんど。3つか5個か、奇数で買えよ」

お母さん 「ねえ、パラダイス通りわかる？」

ミーカー 「国際通りの裏ですよね」

お母さん 「そこに焼肉居酒屋があるんだけど」

ミーカー 「知ってます！ よく行きますよ」

お母さん 「私の実家、そこからすぐだわけさ。

着いたら連絡ちょうだい」

国吉 「それじゃあ、出発しようか」

3人、お喋りしながら実家へ

会話もフェードアウト

★起承転結の転

○実家・キッチン（続き）

婆ちゃん・ハナコ、取材スタッフを待つ

婆ちゃん 「昨日、寝んだらんたん」

ハナコ 「体調は大丈夫なの？」

婆ちゃん 「肝ワサワサーサーによ、ぬーがらいふーなーやたん。戦争のことになったらいろんな思いだすわけさ」

ハナコ 「ウチもね、昨日はいろいろと考え込んだ。お母さんに思いのたけをぶつけたけど、そこまで親に誤らせ続けるウチって何様な……あ、来た！」

婆ちゃん 「アンタ、耳いいね」

ハナコ 「耳と顔だけは上等なの（笑）」

ピンポーン、お母さんと国吉、到着

ピューっと風が吹く

ハナコ 「はい」

お母さん 「ただいまー」

国吉 「こんにちはー」

お母さん 「いつも婆ちゃんの面倒見てくれてありがとーねー」

国吉 「昨日は、いきなり電話を替わってしまつてゴメンね（笑）」

国吉です」

ハナコ 「こちらこそ（笑）どうぞどうぞ」

3人、婆ちゃんの待つキッチンへ

国吉 「お邪魔しまーす」

お母さん 「ただいま、婆ちゃん」

国吉 「あいあい、ねーさん、いちゃんだ立たなくてもしむんど」

婆ちゃん 「おたくは……たーやが？」

国吉 「国吉倫太郎といます」

婆ちゃん 「あーはー、電話の」

国吉 「ねーさん、今、若いのーにお菓子買わせているからさ、先に僕らだけでも手いーうさーしときましようね」

婆ちゃん 「国吉さん？ 長男ね？」

国吉 「ひとりっ子の長男です」

お母さん 「何でよまた？」

婆ちゃん 「仏壇が好きそうだから長男かねーと思ってさ。ルリは人の家に行ってもウートートーとかできんぬーだろ？ 仏壇に

うさぎーし、チャーカミー専門」

お母さん 「ぬーんち、久々に帰ってきてるのにすぐゴークチな？」

国吉 「だあ、一緒に手いうさーしよう」

お母さん・国吉、ウートートー

ハナコ 「麦茶とコップ、適当に置いとくから、飲みたい人は勝手に飲んでねー」

国吉 「ありがとうね」

お母さん 「グソーのタンメーターに、婆ちゃんをもっと長生きさせてくださいってお願いしたからよ（冷やかし笑い）」

婆ちゃん 「ぬーんでい？ アタビチわらばーひゃ。わんや、へーくなー

グソーんかい行ちゅんでい、くんぱとーるむんや」

国吉 「くんぱるくらい元気なら、グソーに行きたくても行けない

はずよ（笑）」

婆ちゃん 「あじえ、またな？」

国吉 「あらためて、国吉倫太郎といっています。今回はよろしくお願

いしますね」

婆ちゃん 「ルリの母です。ウーマクー娘がいつもお世話になっていま

す」

国吉 「いえいえ、こちらこそ、いつも助けられていますから」

婆ちゃん 「ルリは昔からウーマクーだよ」

国吉 「今もですよ。こうと決めたら、イノシシのぐとう、ちゃー

直進よ」

婆ちゃん・国吉、爆笑

お母さん 「ちよつとー……アンタ達よもー」

国吉 「ですが、その情熱に、僕らは助けられることばかりなんです」

婆ちゃん 「国吉さんが落ち着いているからいい塩梅になるわけさ」

国吉 「あいっ！ 最初から『ねーさん』と呼んでしまっているさ。

僕は倫太郎ですので『倫ちゃん』でお願いします」

婆ちゃん 「倫ちゃん？」

国吉 「玉のように可愛い倫ちゃんです」

婆ちゃん 「はははは、はぎじゃびよいよい、可愛らしい倫ちゃんですんでい、髭んバーバーし、マジムンらさにひゃ」

国吉 「ねーさん、でーじやつさ。こんな島正太郎みたいなチュラカーギーつかまえてマジムンでい」

ハナコ 「2人よもう親子みたいさ(笑)」

婆ちゃん 「ルリ、アンタより倫ちゃんのほうが喋りやすい」

国吉 「わんもよ、ねーさんのほうが喋りやすいさ」

一同、大笑い

ピューつと風が吹く

ミーカー・めぐみ、到着

めぐみ 「着きましたー」

ミーカー 「お邪魔しまーす」

国吉 「だあ迎えてこうね」

お母さん 「もう国吉さんの家みたいさ」

婆ちゃん 「ルリ、うれー、座あ持ちちゃーや」

国吉・ミーカー・ルリ、キッチンへ

ミーカー 「こんにちわー」

お母さん 「家の場所、よくわかりよったねー」

めぐみ 「すぐそこだったのよ」

ミーカー 「焼肉居酒屋の裏手にまわったら、国吉さんの笑い声が聴こえてきて」

国吉 「ミーカー、さすがお前、昨シーズンとは勢いが違うな！」

ミーカー 「何ですかそれ（笑）」

お母さん 「もうよ、婆ちゃんと国吉さん、勝手に親子なっているさ」

国吉 「僕もよ、ねーさんのおっぱい飲んで育った記憶があるさ」

一同、爆笑

めぐみ

「こんにちわ、めぐみです。あの、お婆ちゃん、ジュースとお菓子買ってきたので後で食べてください。仏壇にうさぎときましようね」

婆ちゃん

「あいつ。アンタ、顔いちばん可愛いね。ハナコの小さい頃に似ちよーさ」

ハナコ

「何だわけ、また」

お母さん

「婆ちゃん、これがミーカー」

婆ちゃん

「もう名前たくさん覚えきれるかよ」

国吉

「僕は、可愛い倫ちゃんですからね」

婆ちゃん

「アンタはあんまし可愛くないよー」

一同、爆笑

お母さん 「だあ、ミーカー。遅れてきているのに、早く手いうさーして」

ミーカー 「遅れたのはお使いのせいです！」

お母さん 「すぐ人のせいにしない」

ミーカー 「国際通りもレジも人が多くて」

お母さん 「ありまたすぐ人のせいにしない」

国吉 「ウンタクは2番どうやる、まずはウートートーから済ませ

よう」

ミーカー 「何をお願いするんですしたっけ？」

一同、ズコーーッ

国吉 「決まってるさ、国吉倫太郎の健康とご多幸をお祈りしなさい」

めぐみ 「ありがとうだけでいいんだよ」

婆ちゃん 「えー、仏壇はお願いするもんじゃないよ。無事健康でいらてますんでい、ありがとうするもんだよ」

ミーカー 「そーなのかー」

めぐみ 「これからも、いろんな人達との出会いをありがとうございます
ます」

ミーカー 「アタシはすこぶる美しく成長することができました、あり
がとね」

国吉 「仏壇に向かって自画自賛な？」

婆ちゃん 「上等やる。むる可愛いさ」

お母さん 「ハナコが麦茶用意してくれているけど、誰か飲むー？」

国吉

「録音中はアレだから、今のうちに飲むなり、トイレ行くなり、済ませて。ミーカー、一緒に機材準備しよう」

ミーカー

「今飲めいうから飲んでるのに！」

国吉

「携帯も電源切ろう」

ハナコ

「家の電話も受話器はずしとく？」

国吉

「親戚から連絡あったとき大変するから家のは大丈夫。鳴ったら鳴ったで仕方ないさ。それより、ハナコちゃんのほうは緊張とか大丈夫？」

ハナコ

「どう話せばいいのやら」

国吉

「いつもの会話なんだから、リラックスしてさ。身体のチカラ抜いて、ダラダラーしたらいいよ」

ハナコ

「うーん……」

国吉・ミーカー、機材の準備

お母さん、麦茶を片付ける

場に、少し緊張感が漂い始める

お母さん 「逆立ちしてごらん、ほぐれるよ」

ハナコ 「運動神経ゼロだもん」

国吉 「あんまり気にすると、よけいだよ。ゴロンと寝転がって手足ブラブラするだけでも緊張はほぐれるから」

ハナコ 「ぶらぶらぶらぶらぶら……」

めぐみ 「じゃあ、ハナコさんの身体の力が抜けるように、アタシも

手伝います」

ピューっと風が吹く

めぐみ、ハナコにチビグツスイ

ハナコ、仰向けの体勢から飛び跳ねる

ハナコ 「あわわわ………ったー！」

めぐみ 「ふふふふ」

国吉 「ハナちゃん！ 大丈夫？」

ハナコ 「誰だなのよもー………しに痛い！」

婆ちゃん 「とー、はい、チビグツスイされたからチカラも抜けるはず

よ（笑）」

国吉 「もろ、入ってない？（笑）」

ハナコ 「むっっちゃ痛い（笑）」

めぐみ、唯一の目撃者である婆ちゃんに

「シーツ」のジエスチャー

お母さん

「ハナコ、運動不足だから、お腹とか下半身がつったんじゃない？」

ハナコ

「お尻がつるつてあるかよ……」

お母さん

「あるさー、お母さんもひっちー、家でこんなーなるよ」

ミーカー

「ルーリー先輩、家でこんなーなんですか？」

国吉

「えー、想像してしまっただろ」

婆ちゃん

「えー、ひとり運動会よ、恥ずかしいから早く座りなさい」

(笑)

国吉

「ハナコちゃんの激痛が治ってから始めよう (笑)」

ハナコ

「もう大丈夫です、かも？」

一同、爆笑（会話、フェードアウト）

お母さん 「じゃあ、やってみよっか」

国吉 「ハナコちゃん、婆ちゃんといつも通りに喋っている感じでいいからさ。きちんと話すとか、ラジオに録音されているとかは気にしないで」

ハナコ 「すこーし、緊張もほぐれたかな」

国吉 「じゃあ、ねーさんもハナコちゃんもスタンバイOK?」

婆ちゃん 「いちやていん、しむんど」

国吉 「ハナコちゃん、まかちよOK?」

ハナコ 「まかちよOK（笑）」

国吉

「じゃあもう機材のボタン押してあるから好きなように話していいよ」

ハナコ、体勢を婆ちゃんのほうへ

国吉

「かななじ集団自決の話からでなくても、ハナコちゃんが聴きたいように何でもいいからさ」

ハナコ

「聴きたいこと……でわ、婆ちゃん。『集団自決についてどう思いますか?』とか聴くんだよね、取材みたいに」

婆ちゃん

「えー、ハナコ」

婆ちゃんのほうから口火を切る

婆ちゃん

「昨日の続きよ、ハナコは沖繩戦を語り継ぐのはどう思うか？」

ハナコ

「ウチ？ うーん……」

婆ちゃん

「ハナコが、沖繩戦を語り継ぐのは大事と思うのは何でね？」

ハナコ

「婆ちゃんから集団自決の話はよく聴いているからさ、だから身近に感じるんだけど……沖繩戦はとても悲惨で、この世の地獄と言われて……けどその地獄を体験した爺ちゃん婆ちゃん達がどんどん天国へ行ってしまおうと、やがて、この世の地獄を体験した人達がこの世から1人もいなくなる」

婆ちゃん

「うん」

ハナコ

「そうなる前に、また戦争にならないためにも、地獄を体験していないウチとかお母さん達の世代へ、沖繩戦の悲惨さを伝えるのは大事だと思う」

婆ちゃん 「したらその大事というのは……」

ハナコ 「一緒によく夕方のニュース番組を観たりするでしょ？ こ

ないだ絵本のニュースを観て、思ったことがあって。有名な絵本作家がいてね、これまでにない絵本を作って、それが大人気で、トークショーをしたんだけどさ」

婆ちゃん 「トークショーしたら講演会か？」

ハナコ 「うん。けど、その内容が『こんなにも画期的な絵本を作っ

た俺って凄いだろ』みたいなことばっか言ってる、肝心の『子供のために』とかそういう言葉はいつさい出てこなかったみたいでさ。きっと、この絵本作家は『文明』はあるけど『文化』がないんじゃないかなーって思った」

婆ちゃん 「文明はあるけど文化はない？」

ハナコ 「凄いテクニクやセンスで面白い絵本を作ることはできる

けど、誰のために作るのかという根っここのところで……最近だと大人も読んだりするけど、やっぱり絵本って、子供のためのものじゃないかなって思うのね」

婆ちゃん
「うん」

ハナコ 「だから、その絵本作家は『子供のため』よりも『自分の凄さをアピールするため』に作りたいただけじゃないのかなー……それって、この世から沖縄戦のさ、地獄の体験者がいなくなつたときに、きつとこうなるのかなーって思ったわけ」

婆ちゃん 「こうなる？ どうなる？」

ハナコ 「この世から、地獄の体験者がいなくなつたときに『そもそも戦争はダメだよね！』っていう根っこはどこかへいつちやっつて、凄い外交戦略とか国際条約ばかりが優先されてさ『こういう場合は仕方ないよね』って戦争を始めちゃうのか

なーと思ったり」

婆ちゃん 「やぐとう、語り継ぐのは良いことじゃないかーんでいな？」

ハナコ 「うん」

婆ちゃん 「絵本のニュースを観て、戦争のことまで考えきれるのは、そーとーでいきやーぐわーやる」

ハナコ 「みんなそう思っていると思う。だから語り継ごうとしているんだし……でもそれ婆ちゃんは悪いことだと思っているんでしょ？」

婆ちゃん 「ハナコのいう『みんな』とはまた違う気持ちがあるわけさ」

ハナコ 「また戦争になったらどうするの？」

婆ちゃん 「ハナコよ、まだ気づかんか？」

ハナコ 「何がよ？」

この場にいる全員に問うように

婆ちゃん 「もしかしたら、これ聴いている誰ひとり、気づいていないのかもねー？ 沖縄戦の地獄を語り継ぐことは良いことだと思っっているんだはずねー」

婆ちゃん、一拍おいて

婆ちゃん 「じゃあさ、いったー全員がだよ。沖縄戦の地獄を語り継ぐのは正しいことだと思っっているならさ、思いだしたくもないことを思いだして、語り継がないといけない『わったーの気持ち』は誰も考えてくれんわけ？」

婆ちゃん、麦茶を飲む

婆ちゃん

「沖繩戦の地獄を語り継がなければいけないといって、すぐ体験者に取材するさーね。取材する人も、ニュースを観る人も、世間の風潮も全部がそう。戦争を起こさないため、子供のため、未来のため、そういう大義名分や正論をどーや。全員から突きつけられたら……だあ、わったーは『嫌です』とは言えるか？」

『正しいこと、立派な取材をしている』んでい、

自分達のことびけー優先させる前によ、戦争体験者の気持ちに味方してくれる人はいないわけ？おじーおばーたーに哀りさせて、まわりはまるで良いことをしていると思っっている、これだわよ、ハナコに聴きたかったのは。戦争を語

り継ぐのは良いこと、婆ちゃんの気持ちも大事、これ矛盾していかないか？間違いではないことをするときこそ、それで誰かが悲しい思いをしていないか気をつけてあげないと」

婆ちゃん、残りの麦茶を飲み干す

婆ちゃん 「ハナコ。さつき、ニュースの話をしていたさーや」

ハナコ 「絵本作家の」

婆ちゃん 「婆ちゃんはや、写真コンテストのニュースを観て感じたところがあるわけよ。うり、旧盆前に毎年やっているさ、学生たーが」

ハナコ 「学生の写真コンテスト？」

婆ちゃん 「写真でも作文コンクールでもさ。沖縄代表に選ばれるっ

てからに沖縄戦をテーマにしたがるさーや。オバーのチラぐわーマギマギー写真撮うやーに、毎年こんな同じのぼっかりさ。だがよ、取材される1週間も前から、取材されるオバーたーや、目まいがしたり、チブルやみーさーに夜も眠れなくなっているの、この学生たーは知らんだろ？ 写真コンテストじゃなくてもいいよ、大人でもそう、テレビでもラジオでも新聞でもそうさ。取材する人達はみんな良い人。礼儀正しい、挨拶もばんないする。けどさ、ハナコ。これ達は良い人達だけれども、取材しているときのオジーオバーたーしか見えていないわけよ。

『沖縄戦の地獄を語り継ぐ活動は良いことだ、立派な取材をしているんだ』

こう考えているうちは、わったー取材される側の気持ちを本

当の意味で考えきれている人はいないはずよ。して、さつきもわんが聴いたとき、誰ひとり返事しきれんかったさーや。気づいてないからだわけよ。これは怖いよー。まわりから『語り継がんと』んでいよ、無言の強要、いじめ」

婆ちゃん、麦茶を飲み干す

ハナコ 「……ハラスメントだね、それ」

婆ちゃん 「だあはい、アンタがたにこれだけ説明するって疲れたさも

う（笑）」

ハナコ、婆ちゃんに麦茶を注ぐ

ハナコ

「沖縄戦の取材というのは、確実に相手を傷つけてしまうんだね。取材が終わってあとから体調を崩して病院で診察を受けた体験者だっと思っていたと思うけど、その診察代や交通費を請求する人なんて誰もいないもんね。

それが、知らなかったで済まされてきたのは、語り継いできた人達の善意にアグラをかいてきたからなんだよね」

婆ちゃん

「わんや、ゴージュチしたいわけではなくてよ、ウチアタイしながら取材してくれんかねーってことだわけさ」

ハナコ

「婆ちゃんの話聴いてね、ウチも腑に落ちないことを思いだした」

婆ちゃん

「沖縄戦を語り継ぐんでいな？」

ハナコ

「学校でね、沖縄戦の地獄を語り継ぐ平和学習があるんだけど、学生の頃なんて、誰がも戦争の話に興味ないのよね。で

も、夏の暑い日に、エアコンもない体育館に全校生徒が集められて『沖縄戦を語り継ぐ』講習会とかよくしてるけどこんなさ、みんなウチワパタパタさせながら『早く終わんないかなー』って聴いてるし、絶対、身につくはずないよね（笑）。それなのに『我が校では積極的に平和学習に取り組んでいきます』とか何とか、学校のえらい先生達は言うわけで。

それって、中学と高校6年間習っても喋れない『ただやっ
ているだけ』の英語教育と大差ない感じがするなア」

ミーカー
「それ、アタシも思っ……あっ！すみません、声だしちゃっ
た」

国吉
「いいよ」

婆ちゃん
「しむさや？ みんなで話すから意味があるんであって、ひ
とりは聴く人、ひとりは話す人んでい分けているうちは、こ

れ絶対身につかんことだからよ。だあはい、今度はアンタの番やる」

ミーカー

「学生さんのことでも思いだしたんだけど。さっき買いだしに行ったとき、国際通りでね、修学旅行生が5〜6人、歩道いっぱい横に広がって歩いててさ……しかも、これがまたチンタラ歩くもんだから、なかなか先に進めなくて。横に広がっているぶん追い越すこともできないし。それで、こっちに來るの遅れたんだよ」

婆ちゃん

「相手に迷惑をかけていることにすら気づいてないわけよ」

お母さん

「沖縄戦を語り継ぐときには、取材を受けてくれる体験者の

『取材に前後する負担』も配慮する必要があるってことと。沖縄大好きと言いなながらも、歩道いっぱい横に広がりながら歩くことで『他の通行人の迷惑になっている』ことに気づいていないことと」

国吉 「似ちよーさや」

ハナコ 「ウチのモノレールの話とも似てる」

婆ちゃん 「これ、先生が気づいてないのに、生徒に教えきれぬわけがないさーや。してよ、これ達が気づかないまま大人になるから、自分達の子供に教えきれぬわけないさーや。こんなして、どんどん世の中がよ、いろいろと気づく人ほど生きづらくなつてくわけよ」

お母さん 「モノレールの話って何ね？」

ハナコ 「もー……ウチが学生の頃に、学校行きたくないってから、

お母さんにもきちんと話したけどな」

婆ちゃん

「いったーアンマーや、すぐ忘れる人だから何回でも話してあげれ」

ハナコ

「簡単に言うとな。モノレールで騒いでいる子達がいるでしょ？ その子達は学校でもうるさいんだけど、先生からは『明るくて元気な子』って人気があったりするわけで。

で、ウチはモノレールとか静かに乗るタイプなんだけど、学校ではそれが『ハキハキしていない』とか『積極性が足りない』とかマイナス評価だったりしてさ。あきらかにウチのほうがまわりに迷惑をかけていない常識人だと思うのに何だかなーってね、学校へ行くのがどうでもよくなっただって話」

お母さん

「それ、聴いた覚えあるかも」

めぐみ

「その気持ち、わかります」

ミーカー 「アタシもそれすごく共感できる」

国吉 「じょーい、ミーカーがな? (笑)」

お母さん 「けど私もさ、ハナコと同じ気分になったことあるな。運転中にね、左へ曲がるときに、ゾロゾロと横断歩道を渡る観光客が遅くて遅くて。全然左折できなくて『アイラブ沖縄のTシャツ着ているんだから、もう少し地元民のこと考えなさいよ』ってイラつくことが多々ある (笑)」

国吉 「それ、多々あるよな (笑)」

お母さん 「まー、こんなこと言ったらアレだけど、国際通りは素敵なところだよ。観光客もさ、修学旅行生もさ、1人ひとりみんな良い人だと思っし」

国吉 「一部の人達が、かな」

プルルル、家の電話が鳴る

国吉 「どうぞ、録音は止めるので、電話に出てもらっても」

ハナコ、受話器を取りに

お母さん 「どうする？ もう話も脱線しているし、そろそろお開きに

しよっか」

婆ちゃん 「渡嘉敷島のせつちゃんやがや」

国吉 「せつちゃん？」

ハナコ 「はい、もしもし」

電話相手 「お忙しいところ申し訳ござ……」

ハナコ 「営業だね？」

電話相手 「今度の選挙、投票はまだ……」

ハナコ、電話を切る

ハナコ 「こんなする候補者にはよけいに票入れたくないけどな

(笑)。『私は電話での選挙活動をいたしませんし、県内の営業電話も禁止させます』って人がいたら絶対その人に入れるのに」

★起承転結の結

○実家・キッチン

国吉 「あのー、今、せつちゃんって」

婆ちゃん 「親戚の話よ、気にさんけ」

国吉 「もしか、渡嘉敷島で民宿やっているせつこ姉さんじゃないですか？」

婆ちゃん 「ゆくし？　なんでわかる？」

国吉 「僕、せつこ姉さんの甥っ子です」

婆ちゃん 「また始またんど、ウソつきなさい」

国吉 「せつこ姉さんのお兄さんは……？」

婆ちゃん 「ゲンジ兄さんな？」

国吉 「僕はゲンジの息子です。長男です」

婆ちゃん 「はつきさびよいよい」

お母さん 「そういえば国吉さん、渡嘉敷島の生まれって言ってたよね」

国吉 「2歳までは渡嘉敷島にいたよ」

婆ちゃん 「待てよ、倫。アンタもしかして、ちつぴるのーとき、毎日まっかーらー帽子被ってなかったか？」

国吉 「それ僕よ（笑）。ゲンジが英語ペラペラだったから、アメリカの友達からもらった帽子。お気に入りで、小学生の頃まで被ってました」

婆ちゃん 「あのハンダヤーの赤帽わらばーが。へえ、こんなに立身し」

国吉 「でーじやっさ、初対面の僕にまでゴーグチ始またんど」

婆ちゃん 「はいもうガッティンした。ゲンジ兄さんくわーよ、たしか長男がいたよ。育てた覚えもあるのに」

国吉 「小さい頃に会っていたんだねー」

婆ちゃん 「倫。ヤーがチップルーのときよ、わんがる面倒見ちよーんど。アンタが生まれたばかりのとき、チブルんかい牛ぬクスーたつくわやーに、でーじなハゴーぎさぬ、毎日取って

捨ていやーに、おしろいも塗ってあげて」

国吉 「牛ぬクスーって」

お母さん 「ゴメンね、わったー家系よ、むるクチん悪っさんばーて」

婆ちゃん 「アンタほんとに、わんぬオツパイも飲んで育っているんだよ」

国吉 「ハツハツハツハ」

婆ちゃん 「もう意味んわからんが、よく見たら鼻と目のところがゲンジ兄さんかい似ちよーさ。何で気づかなかったかね」

国吉 「へー、似ている?」

婆ちゃん 「まったち。けして男前とは言えないけどよ、ゲンジ兄さんは、したたか優しい人やたんど」

国吉 「えー、いったーアンマーよもう。したたか優しい兄さんのひとり息子に、牛ぬクスーとか、男前ではないとか」

婆ちゃん 「して、せつちゃんはまだ元気しているかね？」

国吉 「あ、電話させますよ」

婆ちゃん 「いいん、わんねー嫌われているはずだから、それだけはならんど」

お母さん 「何ですよ？」

婆ちゃん 「戦争終わって、わんが那覇に嫁いでからも何回かは会いよったけどさ。いつだったか、もう何十年も前よ？ せつちゃんが大病さーに、渡嘉敷では治せんから那覇の病院に来たわけよ」

国吉 「静脈瘤の手術のときだ」

婆ちゃん 「わんよ、弱っているせつちゃんの姿が見きれんくてからさ、お見舞いに行けんかったわけよ」

ハナコ 「だから嫌われているわけ？」

婆ちゃん

「電話しようかねーとか悩んでいる間に今度は『去年、亡くなりまりました』んでき言われるのが怖くて、もう何年も音信不通になったまままだわけさ」

国吉

「知り合いなら、僕も話は聴いていたりして、ねーさんのことすぐわかりそうだけどな」

婆ちゃん

「集団自決のときもよ、せつちゃんと2人『カマー、最後まで一緒だよ』んでき泣いた仲どーや」

国吉

「あー！ そっか、せつこ姉さんが話していた『カマー』が、ねーさんのことだったのか」

ハナコ

「何で、カマーよ？」

婆ちゃん

「わかるかよ、婆ちゃんが生まれた時分から、みんなが『カマー、カマー』しよったのに」

国吉

「なるほど。それで『照屋ヨシ』の名前を聴いてもわからな

かったんだ。せつこ姉さんから、カマーの話はよく聴きましたよ。いちばん会いたい人だけど、お見舞いにも顔を見せないということ、『何かしら家の事情があるんだはずねー。こんなときは自分から呼んだら迷惑なるよねー』ってから」

ハナコ
「出ました、お互いによけいな遠慮」

お母さん
「婆ちゃん、昔の人だから言葉がアレだけど、今風に言うと、せつちゃん姉さんにとってもう自分が『過去の人』になっちゃってしまっていたらどうしようというのが怖かったんじゃない?。」

国吉
「せつこ姉さんもずっと心配していたのに。僕から連絡をとって、必ず電話させます」

お母さん
「よしっ、じゃあハッピーエンドのまま、みんなで焼肉居酒屋へ行って、打ち上げでもするか!」

ハナコ 「何かよ、いきなし」

国吉 「いや、僕からもご馳走したい」

お母さん 「何言ってるの？ 婆ちゃんと娘のぶんは私が出します」

国吉 「ねーさんと僕のためでたい話なのに、僕に払わせてさ」

ミーカー 「どっちにしろ、アタシにおごってくれる人はいないってことで（笑）」

ハナコ 「せっかく感動の再会しているのに、いきなし焼肉とかよー」

婆ちゃん 「ルリが正解ど、こんなして誰かが話を切ってくれんと、このは終わらんからよ。元気しているのが聴けただけでも充分だのに」

国吉 「いやーもう、まいったな」

お母さん 「じゃあ、機材片付けよっか」

ハナコ 「婆ちゃんと国吉さん、本当に親子みたいさ」

婆ちゃん 「ルリとハナコは、もう少しぐわー、本当の親子らしくしな

ま

お母さん 「何だわけ、もー」

一同、爆笑（会話、フェードアウト）

★起承転結の結★

○キッチン

お母さん 「して、婆ちゃんは行かんわけ？」

婆ちゃん 「歯もないのに、どんなして食べるからよ」

お母さん 「ここの肉、柔らかいってば」

婆ちゃん 「いいん、歩っちーうさんばーて」

お母さん 「すぐそこだけどな……」

国吉 「ハナコちゃんも行かないの？」

婆ちゃん 「わんぬ心配さんていしむんど」

ハナコ 「違う、絵のメ切があるから」

お母さん 「お金の心配もしなくていいよ」

ハナコ 「そーゆー問題じゃないさ」

婆ちゃん 「そーゆー問題あらんしが」

ミーカー 「みんなでワイワイしたかったな」

国吉 「じゃあ……ハナコちゃん、そこでしばらくは打ち上げしと

くから、絵が早く仕上がったらおいでね」

ハナコ 「てか今回の取材、途中からみんなで会話しているし、使え
るの？」

お母さん 「せっかく大事なことに気づかされたのに、練り直すさ」

国吉 「だからよな、ヒントもたくさんもらったけど、これをどう活かすか……」

取材することにウチアタイしながらも、沖縄戦の地獄を語り継ぐ取材をやめる、というわけにはいかんしな」

婆ちゃん 「えー、倫」

国吉 「はい」

婆ちゃん 「いったーよ、誰に、沖縄戦の地獄を語り継ごうとしているわけ？」

国吉 「次の世代に……かな」

婆ちゃん 「したら『どう語り継がれているのか？』そろそろ聴いて歩いたらどーか」

お母さん 「ん？」

国吉

「そっか、取材する人を、体験者から団塊の世代に変えるわけか！ これまでにたくさん語ってはもらってたけど、そのひとつ下の世代にはどう受け継がれているのか。これこそ、体験者がまだ生きている間にすべき取材じゃないか？」

お母さん

「体験者達の言葉を『アナタはどう継いでいますか？』ってことよね。今までどこもやってない企画じゃない？」

国吉

「これは凄いい企画になりそうだな！」

お母さん

「あとはさっそく、出てくれる団塊の世代を探さんと」

国吉

「探さんくても、まんどーるむんや」

お母さん

「知っちゃーるーがいるわけ？」

国吉

「平和記念館の館長とか、てーげーわったーと同年くらいどー」

お母さん

「あーはー、たしかに」

国吉

「戦死した学徒を祀っている石よ、石碑さ。その守り継ぐ会の会長とかも、てーげー同年代あらに。こんな人達にお願いしたら出てくれんかな」

婆ちゃん

「考えがまとまってよかったさ」

国吉

「全部ねーさんのおかげ」

お母さん

「さすがは私の婆ちゃんだしよ?」

国吉

「ひっちー喧嘩している人が」

婆ちゃん

「怒るのも疲れるんだよ。倫、かんなじ、そーていけーよ。来たときよりも美しく、いったーがる責任どうやる」

お母さん

「でーじ、私はゴミかよ」

婆ちゃん

「だあはい、いつまでこんなしているからよ。早く行け」

お母さん

「何だわけ、追いだすみたいにな」

婆ちゃん

「して、追いだしているのにな」

国吉

「じゃあ、ねーさん、また今度ね」

ミーカー

「ハナコさん、またねー」

お母さん

「今日はありがとうねー」

婆ちゃん

「ハナコも行けばいいのに」

ハナコ

「しむん。絵のメ切があるってば」

婆ちゃん

「して、寝てるさ」

ハナコ

「今からやろうしてるってば」

婆ちゃん

「えー、お母さんのこと、あんまし怒らんけよ。」

6人兄弟の

なかで、アレがいちばん婆ちゃん孝行そーんど」

ハナコ 「うん」

婆ちゃん 「アンタが来る前、ルリがお金のことやって、他の兄弟が婆ちゃんの顔見に来ていたわけよ。だあ今は、兄弟達に孫も生まれたから、みんな忙しくて来れなくなっているけどよ。だから、今乃てから家に顔出さないってルリのこと怒るのはまた別の話ど」

ハナコ 「それともまた別の話さ……」

婆ちゃん 「ハナコ、ヤーが持つちよーしー、ぬーやが？」

ハナコ 「わからんけど落ちてた」

婆ちゃん 「ルリはよ、アンタのお父さんが病気で亡くなったときのお金、一銭も使わんのに、他の兄弟の倍、婆ちゃんに渡しているんだよ。えらいと思うさ」

ハナコ 「大丈夫、お母さんのことはもうまったく気にしていない」

婆ちゃん 「あらん、少しは気にしなさい」

ハナコ 「もったこう、お母さんやいろんな人達とコミュニケーションが取れたらなーって」

婆ちゃん 「それで、今日は普段以上にみんなに愛想よくして、頑張ってたんだろ？」

ハナコ 「ゆーわかやーやる」

婆ちゃん 「して、婆ちゃんだのに」

お母さん、戻ってくる

お母さん 「おかえりー、忘れ物したさ（笑）」

婆ちゃん 「またな」

お母さん 「あ、ハナコ。それ」

ハナコ 「はい、ここに落ちてたよ」

お母さん 「国吉さんがわざと落としていってるわけさ。アレのするワザよ」

婆ちゃん 「倫がな？ ぬーんち」

お母さん 「私に、もう1回ここに来させよう考えよ。婆ちゃんとハナコときちんと話し合いなさいって」

婆ちゃん 「こんなこともするんだねー」

お母さん 「アレ、でーじな格好ちきやーど」

ハナコ 「お母さん、あの……昨日はさ」

お母さん 「あーはー、昨日の電話のことね？ アレはお母さんが悪いのに、ハナコが謝らんでいいよ」

婆ちゃん 「謝らせてあげればスッキリするのに意地悪やっさ」

お母さん 「私、B型なのに（笑）」

婆ちゃん 「いったーが喧嘩するたびに、わんが原因らはじやーんでい、

ウチアタイそーんど。わんぬ面倒見るために、仕事辞めて
るハナコが哀りだよ」

お母さん 「何でそーゆー話になる？」

ハナコ 「だからよ」

婆ちゃん 「でもよ、ハナコがいてくれるおかげで、わんも助かってい
るわけさ。喋り相手がいないと、することもなくて、1週
間ですぐボケるはずだからよ」

お母さん 「だから今のままでいいさ。申し訳ないけど、私のぶんまで、
ハナコが婆ちゃんを見てくれてるんだし」

婆ちゃん 「だがよ、わんがいなくなれば、ハナコも自由になるさーや」

ハナコ 「あほくさ」

婆ちゃん

「入院しているときよ、夜中に目が覚めるさーね、したらまず天井が見えるわけよ。横向いても、たーんうらんさーや。ああもうひとりぼっちで死ぬんではずねーってからに、病院うてい、ひっちー泣ちよーたんよ」

ハナコ

「婆ちゃんが眠れないのは、いろんなこと心配しすぎ」

婆ちゃん

「家で横なつてても、わんねーよ、昔からアレコレ心配さーに寝んだらん、うれヤナ癖やんばーて。だが、わんぬムツサイクツサイする音聴いてからに、ハナコが『眠れないのか?』んでいよ、すぐ寢室まで呼びにくるわけさ。これがもう嬉しくてよ、ホツとする」

ハナコ

「だからそれでいいさ」

お母さん

「じゅんによ、何の心配がある?」

婆ちゃん

「いいのかねー、ハナコ。アンタが仕事しなくても婆ちゃん

のそばにいれるのーは、アンタのお母さんが人の倍働ちゃー
にや、お金を入れてくれているおかげではあるけどさ」

お母さん

「何かよ今さら。アンタ達にお金の心配させないのが、私の
仕事だのに」

婆ちゃん

「いったーびけーナンギさしやーに、わんや生きてるだけ
で罪やさやーんでい思むてーしーしーすーんばーて」

お母さん

「はっしもう。婆ちゃんが心配するぶん、ハナコが疲れるん
だよ?」

婆ちゃん

「ハナコ、お前、1日中婆ちゃんの面倒見るつてからに、こ
こ数ヶ月ほとんど外んかい出じらんくなとーさや」

ハナコ

「して、絵の作業あるのに」

お母さん

「たまには遊びに行つて、ゆとりを持たないと、心がペシヤ
ンコなるよ」

婆ちゃん 「ルリ。今日や、かななじ、ハナコも焼肉んかい、そーていー

けーや」

お母さん 「して、婆ちゃんは大丈夫そー?」

婆ちゃん 「いったーがる、わんかい心配さんけーんでい、あびとーる

むんや。いったーが心配してどうするからよ?」

ハナコ 「真剣な?」

婆ちゃん 「婆ちゃんは大丈夫。もう行け」

お母さん 「国吉さんがさ、ハナコに絵の仕事お願いしたいって言って

るわけよ」

ハナコ 「ほへー?」

お母さん 「ハナコと一緒に飲みたいみたいだからさ。お付き合いでする

のも仕事だよ」

婆ちゃん 「あんやる、ルリ。アンタはして、輪とはお付き合いでする

るのか?」

お母さん 「何だわけ急に? (笑)」

婆ちゃん 「アンタ達が良い関係なのは見てすぐわかりよったのにな」

ハナコ 「へー、どんな風によ?」

婆ちゃん 「倫はよ、今日、ルリのこと1回も名前で呼ばなかった」

お母さん 「そうなの?」

婆ちゃん 「わんが呼ぶときは『ルリ』さーや。ハナコは『お母さん』。ミー

カーとめぐみは『ルリ先輩』。だあはい、倫は何て呼びよつたか?」

ハナコ 「待って待って、めぐみって誰?」

婆ちゃん 「たぶんだが、ルリのこと『お前』とか普段は呼んでいると

思うけどよ、今日は婆ちゃんに遠慮してから」

ハナコ 「違う、まず、めぐみって誰よ?」

婆ちゃん 「わんぬそばんかい、ちつぴるーがうたしえー」

お母さん 「怖い怖い怖い」

婆ちゃん 「ミーカー一緒に来よったさ」

お母さん 「来たのはミーカーだけだよ？」

婆ちゃん 「ハナコ、覚えてないか？ めぐみにチビグツスイされたの？」

ハナコ 「はー？ アレ？ えーっ？」

お母さん 「お母さん、麦茶片付けてたから見てなかったけど、アンタは見たわけ？」

ハナコ 「めぐみ……いたかも。そばに誰もいないときにチビグツスイされてる」

婆ちゃん 「だから、めぐみーんでいよ」

お母さん 「えー、もうこの家怖いんですけど？猫返しても絶対住まん

からよ」

婆ちゃん 「しむさ、アンタが来なくてもまためぐみがユンタクしに

来ゆーつさ」

ハナコ 「婆ちゃん、黒い人とは違う?」

婆ちゃん 「似てはいたけどよ」

お母さん 「何かよそれ? フツーに話してるけど、アンタ達、これ、

心霊現象だよ?」

ハナコ 「心霊って、オオゲサな(笑)」

お母さん 「して、怖くないわけ?」

ハナコ 「して『毎日いる』って婆ちゃんが言ってるのに仕方ないさ」

お母さん 「居候だわけ? 私は幽霊養うために働いているわけじゃな

いけどな」

ハナコ 「えー、お母さん、黒い人のこと今知ったの? ひっちー日

記にも書いてるのに、全部読んだとかウソだな」

お母さん 「どーでもいい、そんなことは！」

婆ちゃん 「えー、ルリ。怖かったらさ、もうハナコ連れて焼肉行きな

さい」

ハナコ 「だから婆ちゃんは大丈夫なわけ？」

お母さん 「バカじゃないの？ 大丈夫なわけないさ。幽霊がいるのに、

婆ちゃんに何かあったらどうする？」

婆ちゃん 「もう何ヶ月、これと一緒に暮らしているからよ」

ハナコ 「今年くらいからいるってよ」

プルルル、家の電話が鳴る

お母さん、ベルに驚き、腰が抜ける

ハナコ、電話をとる

ハナコ 「はい、もしもし」

せつこ 「もしもしー？ カマーねー？」

ハナコ 「婆ちゃん、せつちゃん姉さんから」

せつこ 「もしもしー？ アンタ誰ねー？」

ハナコ 「はい、カマーの孫です。姉さん、カマーは足悪いから電話のところまで来るのに少し時間かかるはず（笑）」

婆ちゃん 「だあ、早く替われ」

ハナコ 「早く来い、したら」

せつこ 「倫太郎が電話しれっていう番号にかけても取らんわけさ」

ハナコ 「あ！ せつちゃん姉さん？ 今さ、携帯の電源切っていたわけよ。そっかそれで家にかけてんだねー。婆ちゃん今、こっちに向かっているからもう少し待ってよー（笑）」

婆ちゃん、受話器を奪いとる

婆ちゃん 「せつちゃん？ わんど、カマーど」

せつこ 「じゅんにカマーな？ 本物ねー？」

ハナコ 「じゃあ、準備して行ってこーね」

婆ちゃん、シツシツと手で追い払う

お母さん 「幽霊と留守番させて大丈夫ね？」

ハナコ 「だいぶ前からいるのに、ウチらも猫飼っているみたいなも

んね」

ハナコ・お母さん、フェードアウト

婆ちゃん 「お見舞い行けんでゴメンねー」

せつこ 「しむんどー、倫太郎から全部聴かさったん。わんやまた、

カマーのほう病氣していると思つて、電話できんかったわけよ」

婆ちゃん 「わんもどー」

せつこ 「カマー、懐かしいさ。せつちゃんだよー、覚えてるー？」

婆ちゃん 「えー、せつかくだけだよー、電話切ろうねー？」

せつこ 「あぎじえ、ぬーんち？」

婆ちゃん 「わんねー、ひさ歩つからんぐとうよ、長いこと立ちーうさんばーてー。さつきまで座りっぱなしだったから、今日や、よけい足ネーガーなとーん」

せつこ 「ゴメンねー、カマーよ。さっきのは孫らり?」

婆ちゃん 「孫と一緒に暮らしているさ」

せつこ 「話し相手もいて幸せだねー」

婆ちゃん 「孫と黒い人と3人暮らしよー」

せつこ 「わんや、黒い人と2人暮らしよー」

婆ちゃん 「アンタのところにもいるわけ?」

せつこ 「何十年前から家にいるからよ」

婆ちゃん 「わったーもよ、近頃からベッドで一緒に寝ているさ」

せつこ 「これよ、わんも最初しかまーにや、ユタンかい見せたけど、

大丈夫ど。とつても寂しい人がさ『誰かいなかねー、寂し

いよー』しているうちに、身体から出てくるみたいだわけさ」

婆ちゃん 「毎日、仏壇かい死ぬ相談そーんど。生きててもいいのかねー

んでいよ。えー、足やむるむんや切ろうねー」

せつこ

「アンタも苦勞してるんだねー。だがよ、これがあると、人をたくさん招いてくれるわけよ。倫太郎もそうだよ。ずつと東京いたのが急に10年前にこっち戻ってきて、一ヶ月に2回くらいは顔見せに来るようになったさ」

婆ちゃん

「今日、家にたくさん人が来たのも」

せつこ

「招いているわけさ」

婆ちゃん

「あーはー。したら、わったーやーの黒い人は、わんぬ生霊」

せつこ

「黒い人、やーかい似ちよーさや?」

婆ちゃん

「いや、孫に似ちよーたんど」

せつこ

「あんしえー、孫の生霊どうやる」

婆ちゃん、足の痛みに耐え切れず電話を

切り、キッチンへ戻ろうとするも……

プルルル、家の固定電話が再度鳴る

婆ちゃん 「わんにん、くるすんちな？」

電話相手 「お忙しいところすみません。南国新聞の神谷と申しますが、

ハナコさんはいらっしゃいますか？」

婆ちゃん 「せつちゃん？」

電話相手 「あ、いえ。お母様のルリ様からご紹介いただきまして、ハ

ナコ様とやりとりをしております、神谷です」

婆ちゃん 「やー、たーやが？」

電話相手 「お婆様……でしょうか？ ハナコ様の携帯につながらない

ものですから、お仕事の依頼なんですけど」

婆ちゃん 「営業電話はダメ。ひさ歩っからんむんや。二度とかけてく

るなよー」

婆ちゃん、電話を切る
(終わり)